

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2019/08/05～2019/10/14)

1. 勉学の状況

Universitas Gadjah Mada(以下 UGM)では Fakultas Ekonomika dan Bisnis(以下 FEB、経済とマネジメント、ビジネス全般を扱う学部)の Exchange Student として授業をとっています。授業は、IUP という FEB のなかでも海外志向の生徒に向けて開講されている英語開講の授業をとっているため、生徒や教授陣の英語力は日本と比べても軒並み高いです。話によると IUP の生徒は、IELTS のスコアの平均が 7 程度あるらしい。私はそこで、週に月曜・水曜に 1 コマ、木曜日に 2 コマの計 4 コマを今semesterで履修しています。これは一般的な日本の大学の履修数と比べると少なく感じられますが、その実毎週出る課題の量や毎週の授業で行われる小テストに向けての予習復習など 1 コマあたりにかける自学の量の多さ、そもそもの授業時間が 1 コマ 2 時間半、と一概に比較ができません。また、そのほかに私は現地のインドネシア語の語学学校である、Alam Bahasa という学校に通っています。生活の状況の欄に後述しますが、現地の言語を多少なりとも勉強する必要があると気づき週に 2 コマ、大学外で授業をとっています。

次に交換留学を考えてこのレポートを読んでらっしゃる方にとって、一番気になるであろう、授業やテストの中身についてお話しします。前述したとおり、FEB の授業は 1 コマ 2 時間半が基本で、その中で個々の教授にその時間配分が任されています。例えば私がとっている International Business の授業では、最初 30 分は前回の復習も兼ねた小テスト、そのあと 1 時間半が講義、残り 30 分が学生たちのあいだのグループディスカッションという構成になっています。大体の授業の構成がこのようなものですので、かなり日本と比べるとアクティブな授業です。英語を自分の専攻の分野を学びながら勉強したいという生徒に向けては適した環境であると思います。次にテストについてです。FEB のテストは 1 semesterにつき 2 回、中間テストと期末テストが行われます。中間テストは大体が持ち込み禁止の Closed Book 形式のものです。講義によっては英語が第一言語でない生徒向けに紙の辞書の持ち込みが許可されているものがありますが、大抵は自分の英語の writing も試されることが多いです。もともと writing が苦手で、自身の専門の経済学の学術的な単語をあまり知らなかった私はかなりそこで苦戦しました。それに加え、過去問自体があまり流通しておらず、指定されている教科書の範囲を試行錯誤してテストに臨む羽目になりました。もしかしたら現地の学生とのコミュニケーションをもっと密に行っていればうまくいったのかもしれないので、期末テストの時期にまたあらためて報告します。

2. 生活の状況

実をいうとインドネシアに到着してから今までの2か月間で、日本との違いで悩んだことはあまりありません。むしろ日本よりも充実した良い生活が送れています。現在僕が暮らすインドネシア第二の都市、ジョグジャカルタは、国内で最も多く大学が存在しいつも国内外から多くの学生が留学に訪れるため、学生の街という顔を持っています。そのため学生に向けての居住スペースやカフェ、便利なサービスなどが豊富に存在しています。また、国内最多で歴史的建築物がある都市の一面も持ち、高校世界史で登場する建築物の一つ、ポロブドゥール寺院は市内から30分程度のところにあって毎日多くの観光客が訪れています。ですので、平日は大学や語学学校における勉強を終えた後、そのままカフェに直行。週末は、郊外にある観光地やアクティビティを友達と楽しむといった生活を送っています。

さて、先ほどから何度か話に出ている語学学校、ひいてはインドネシア語そのものについてお話しします。インドネシア共和国は皆さんも知っての通りまだ成立してから歴史が浅い国であり、言語自体もその誕生が約60年前と新しいものでもあります。昔は島々によって異なる言語が使われていたようでジャワ語、スマトラ語などが今も存在しますが、公用語のインドネシア語が現在はその島でも使用されています。国外から多くの留学生が訪れるジョグジャカルタにおいてもそれは例外でなく、市内での生活のほとんどはインドネシア語がメインに使用されています。そのため、長期滞在を見据えるとインドネシア語の習得は必須であると思い、私は到着したのち、現地の語学学校に通ってインドネシア語の勉強を始めました。授業は教科書を用いつつ先生とのマンツーマンの会話がメインで、インドネシア語のみの2時間の授業を終えると毎回へとへとになります。ですが自分自身の成長を生活の中で感じられ、インドネシア語の勉強が凄く日々の刺激やモチベーションになっています。日本に帰国するまでの残り8か月でどれだけ習得できるかわかりませんが、自分にできる最大限の努力をしようと思っています。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2019/11/1～2019/12/31)

1. 勉学の状況

ようやく 1 学期を修了することとなりました。科目ごとに期末レポートの提出や期末試験での評価があり、それを受けての単位認定という運びでこれは日本と大差ありません。そして試験対策についてですが、クラスメイトの現地学生は期末試験の過去問を持っておらず、その代わりに担当の教授が試験範囲を授業内でかなりわかりやすく提示してくれたので問題なくパスしました。今学期を振り返ると、前半は教授陣やクラスメイトが話すインドネシア訛り（特にジャワ語系の）に翻弄され、授業スピードについていくことが難しかったが、ここ 2 か月は徐々にその速さや内容にも慣れてきて、欧米の生徒に交じりたどたどしくも授業内容に対して質問をすることができるようになってきました。自身の課題であった毎週のミニテストや writing スキルも、授業外で教科書なりを読み単語量を増やすことでその課題を克服することができました。

2. 生活の状況

語学学校のほかに、現地のバドミントンサークルやそのほかの団体にもちょくちょく顔を出すことで、少しずつ友人が増えてきました。ですが私が住むジョグジャカルタではこの時期あたりから雨季が到来し、活動圏内も洪水や交通機関の乱れにより大幅に減少しました。ほかにも大雨の影響で停電が頻発し、私が住むアパートではガス系統と電気がつながっているために、帰宅してからしばらくシャワーが使えずに、急なスコールで冷えた体をぶるぶると振るわせるといのがよく起きるようになりました。これは日本で考えると信じられないことだと思えますが、現地に住む人間からするといつものことであるため、「どうせ今日もあの地帯は停電するであろうから、少し長めにお茶してから帰ろうよ！」みたいな誘いもよく受けるようになりました。そしてこの時期あたりになって、インドネシア人の親友とも呼べる存在ができました。彼はガジャマダ大学をすでに卒業しているのですが、ガジャマダ大学の教授の息子で教授を通じて出会うことができました。最初はたまに話すだけだったのですが、10 月の後半に友人グループで行った旅行をきっかけに仲良くなり、大学が終わるとほぼほぼ彼と一緒に遊んでいます。学外での出会いは留学が始まるまでは想定していなかったため、留學生活が始まってからの一番の収穫だと思います。

年明けして少しするとインターンシップが始まる予定なので、今はそれに向けて準備を進めていこうと思っています。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2020/1/1～2019/2/29)

1. 勉学の状況

1月の学期間休みを終えて、大学の後期の授業を受けます。今期は前期と同じく1日1コマで4日間、合計4コマの授業を受けることになりました。その中には前期まではとっていなかった現地学生のための授業もあり、前に受けた授業で仲良くなることができた生徒も受講していたため勇気をもって受けることができました。前期から大学にいるためか、学内で話しかけてくださる教授やクラスメイト達も増えて、キャンパス内での楽しさをより実感することができました。

ですが年始から流行り始めていたコロナウイルスのせいもあり、2月の終盤にガジャマダ大学でもオンライン授業に移行することになりました。その1～2週前に、多少その話は聞いていたのですがいざオンライン授業になってみると、日本でも受けたことのない授業形式のために、授業の質やスピードは授業やその教授によってさまざまでした。大学側からは特段指示もないのか、教授の中には授業を2週ほど告知なしに行わないなど対応もまちまちでした。そんな環境だったためか、自分の中で勉強意欲も学期はじめよりかは失われていました。3月以降に事態がどうなっていくのか予想も立たず、かなり落ち込んでいたと記憶しています。

2. 生活の状況

新年になり少し経つと、前々から計画していた国際交流基金で3週間のインターンが始まりました。自分から直接ジャカルタ支局長の方にアポイントメントをとってこのインターンが実現したため、自分から進んで仕事を進んで取りに行こうという姿勢の元濃密な期間を過ごすことができました。中でも最終週に行ったあるプロジェクトの企画会議には、実際にプレゼンターとして参加して現地のインドネシア人社員にも向けてつたないインドネシア語ながらもプレゼンを行う経験が得られました。

大学のあるジョグジャカルタに戻ってしばらくすると Stay at home 期間に入り、週に1度語学学校に行く以外にはあまり外出をしなくなりました。いつも友人と学校終わりに行っていたカフェやお気に入りの店は軒並み営業時間を早めていたり、いつもの街の様子とは大きく様変わりしました。留学生で親しくしていた友人たちも、国からの要請を受けて帰国していったので連絡が取れる相手も少なくなっていました。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2020/03/01～2020/03/27)

1. 勉学の状況

オンライン授業への移行がスムーズに行われず、授業への興味や関心が薄れつつある。特に在宅での学習はモチベーションの継続にも問題をきたしているため、自分の中では目下課題である。大学に通って教科書を読むことができなかつたりと、授業に必要な物資がこちら側で賄う必要もあり、多くの留学生たちが連日留学生オフィスに詰め掛けていた。そんななか帰国する留学生も出始め、とうとう私も帰国することを決断し、受講していたクラスの教授陣へとメールやWA (What's App) にて連絡を送り指示を仰いだが、返信が得られたのは1クラスのみであった。コロナへの危機感や学習環境への怒りなどが渦巻いていた。そんな中でも、一貫して対面で語学学校を週2回にわたり受講しているが、そちらはいつでもトラブルごとや日々の相談も授業の内外にわたりサポートしてくれた。この語学学習は日本に帰国した後も継続して行うつもりである。

2. 生活の状況

在宅の状況が続いているため、今まで通っていたジムやクラブスポーツなどが開催されず参加もできなくなった。そのため基本的に語学学校以外は自室にての生活である。幸い、日本に比べてオンラインでのサービスは盛んにおこなわれているため、日々の買い物や飲み食いなどには支障をきたしていない。問題があるとすれば、日本人に向けての恐怖の視線くらいであろう。コロナの感染が拡大した当初に、インドネシアにコロナウイルスを持ち込んだのは日本人であるという報道が流れた。シンガポール経由でジャカルタに訪れた日本人にコロナウイルスの陽性反応を確認できたらしい。このニュースが広がったことで、私やほかの日本人留学生は街中で買い物やちょっとした気晴らしの散歩などあらゆる行動をする際に、知らない誰かに「あの日本人は大丈夫なのだろうか」と思われている。現によく遊ぶ友人は、その後両親から日本人と遊ぶのは控えた方がいいと念を押されたという話を聞いた。それでもなお「彼らは違うから大丈夫」と両親に告げ、対等に接してくれる彼にはすごく感謝している。すでに帰国が決定した身ではあるが、この残された期間を大切に活用してこれから帰国した生活につなげたいと思う。